

佳作

私にとっての大切なこと
岩手県八幡平市立安代中学校
3年 畠山 七匠

「兄に勝つ。」

3年前、そのように心の中に決意した私があった。

私の兄はテニスがうまい。といっても私に比べたら誰でもうまいのかもしれない。兄は初めて出場した学年別大会で優勝している。その後も数々の大会で賞を取っている。そんな兄は私のあこがれであり、最大のライバルでもあった。

私は、中学校に入学してから、ソフトテニス部に入部した。運動音痴な私には、先輩のように、狙ったところにボールを飛ばすなんてことはもちろん、ラケットにボールを当てることさえ、ままたらなかつた。「自分には向いていないのだろうか。」と思うようにいかない自分に腹が立ち、ソフトテニスそのものに対しても嫌悪感を抱くようになっていた。「今日も練習か、面倒くさい、やりたくない、やめたい。」そんな弱音を吐く毎日。しかし、そんな簡単な考え、私の母には全く通じなかつた。私の母は、私が仮病を使って部活を休もうとしたときには「少しぐらい具合が悪くても、本気でテニスをしていればそんなものどうでもよくなる。」と言うような人だ。「自分でやると決めたのならば、最後までやり遂げろ。」私が生まれてからの15年間、母のこの言葉を何度聞いたことだろうか。その言葉を聞くたびに泣きそうになる。しかし、私の中の負けず嫌いが、泣くなんて許してはくれなかつた。そこで、目標を再確認することにした。そして気づいた。兄に勝つ。忘れかけていたが、私の大きな目標はこれだ。そのためには何が必要だろうか。練習しかない。その時の私は練習がしたくてたまらなかつた。その次の日の練習から人が変わったかのように練習に取り組んだ。でもやっぱりできないことは多かつた。先輩の足やラケットの使い方を見よう見まねでやってみた。それを繰り返していると次第にできている気がしてきた。

そんな中迎えた初めての大会。地区中総体。個人戦では3年生のペアに散々に負かされた。悔しかつた。しかし、試合をしている先輩方の様子を見てみると、とても生き生きしていて、輝いていて、とてもかっこよかつた。そして「こんなプレーがしたい。」と強く思った。それからもっと練習した。地区中総体から約1カ月半後、学年別大会。そう、兄が優勝した大会だ。兄に勝つためには、まずこの大会で優勝するしかない。自分は弱いと思っていたが、意外と勝つことができた。しかし、結果は準優勝。嬉しいけれど、悔しいの方が100倍は大

きかった。「まだまだだな。」半笑いで言われた兄からの言葉。悔しすぎる。このままではいけない。この出来事は私の性格を少し変えた。嫌なことから逃げていた自分を捨て、嫌なことに向かっていく。それは負けず嫌いが大きくなっただけかもしれない。でも、私はそれでも良かった。それが良かったのだ。それは、練習がしたくてしたくてたまらないからだ。しかも、テニスが楽しいのだ。そんなことは、今まであまりなかった。

テニスを通して学んだこと。それは、テニスだけのことではない。先輩や後輩、先生、コーチ、保護者の皆さん、大会の運営をしてくださっている皆さん、たくさんの人との関わり、礼儀などさまざまだと思う。それらの学びはいろいろな場面で役に立っていると私は思う。そして、この3年間でたくさん成長させてくれたと思う。まだまだ未熟な私だけれど、さらに高みを目指していきたい。くじけそうになった時には、自分の目標を再確認することで、頑張る理由が見つかった。それはこれからの人生でも生かしていきたい。部活のテニスは一度終わるが、私にはまだ受験というものがある。人生を大きく変えるものだ。今は、今まで部活に打ち込んでいた分、勉強に充てたいと思う。自分の人生は自分で切り開かなければならない。そう決めたのならば、最後までやり抜くこと。母の教えの大切さが少しずつ分かるようになってきている気がする。

結局、私が兄に勝つことはできなかったのかもしれない。敵わなかったのかもしれない。それでも、私には、終わらせる気などない。今やっと、兄に近づいてきているのだ。ここであきらめたなら、今まで積んできたものがなくなってしまう気がするからだ。でも、一つだけ。兄に勝つというより、兄とは違う分野でもいいから、自分の得意なこと、自分にしかできないことを磨きたい。それは私にとって大きな、人生をかけての挑戦だ。

これからも、挑戦して行ってほしい。成長して行ってほしい。私は未来の自分がどのような人になっているか、とても楽しみだ。